たり、

〔塵袋二地儀〕一ハ。山。ト云フハ、イカナル山ヲ云フベキゾ、葉山ノ正字如何、

木ノシゲキ山ハ、葉ノイロヲ面ニタテヽ、ハヤマト云フ歟トオボユルヲ、日本紀ニハ麓山トカキテハヤマトヨメリ、麓ハフモトヽヨム字ナレバ、山ノハシノカタヲハヤマト云フベキ歟トオボユ、ハヤマシゲ山シゲケレドナド云ヘルニハ、葉ノ心歟トキコユレバ、兩端ニワタルベキニヤ、

〔圓珠庵雜記〕雛シギ神代紀に雛山祇、これは麓山祇にのぞむるに、常にもはやましげ山とよみて、深くしげれるをしげ山といふ、それにかくかりてかゝれたればしげとしぎと通へることしるべし、

眞淵云、しぎの語は、繁をつゞめいふは、さることながら、鳥のしぎはさる意にはあらじ、餘り思ひよせ遠し、且繁山をしぎ山といふは古語なり、それを違へしめじとて、こと樣の字をわざと假りたる物なり、然れば却りて鳥のしぎは同じ意ならぬなり、

〔古今和歌集一春〕題しらず　　よみ人しらず

み。山。には松の雪だにきえなくに都はのべのわかなつみけり

〔古今和歌集二十大歌所御歌〕神あそびのうた　とりものゝうた

み山には霞ふるらしと。山。なるまさきのかつら色付にけり

〔詞花和歌集四冬〕題しらず　　曾禰好忠

と山なるゑばの立枝にふく風の音きくおりぞ冬はものうき

〔日本書紀一神代〕次生素盞嗚尊、一書云、神素戔嗚尊、速素戔嗚尊、此神有勇悍以安忍、且常以哭泣爲行、故令國內人民多以夭折、復使青。山。變枯、

〔日本書紀二十四皇極〕四年四月戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞍作得志、以虎爲友、學取其術、或使枯。山。變